

三位一体の主日

ヨハネ 3・16-18

2017.6.11 高円寺教会 9:30 ミサ
うめざき たかいち
クラレチアン宣教会 梅崎 隆一神父

国の中で内戦が起こり、その紛争を解決する紛争屋さんという存在があります。伊勢崎という紛争屋さんの話によると、内戦のあとに重要になってくるのは、意外なのですが「裁き」だそうです。

例えば、東チモールで内戦が終り、殺しとか略奪などの罪を犯した人がこっそり国に帰ってくる。そのため、そのような人たちを捕まえて収監する刑務所の存在が重要だそうです。それはその人たちの命を匿うことにもなります。犯罪者をおかまわないと、殺された人の身内が犯罪者を見つけたり、あるいは略奪された村人がその犯人を見つけて殺します。そういったところに紛争屋が間に割って入って犯罪者をかばうと、今度は村人から激怒されます。「おまえはどっちの見方なんだ」と。やがて不信感をもたれてしまい、それが原因で解決がうまく行かなくなったり、村を追い出されてたりしまったりするそうです。

シエラレオネという小さなアフリカの国では、停戦合意が結ばれたときに、村人を殺し、拉致した少年を兵隊にしたりと非道の限りを尽くしたゲリラの司令官が、国のナンバー2になりその国のダイヤの利権を全て手に入れることができました。手先となった兵士の犯罪も不問に付されて、多くの貧しい国民の中で優遇された生活を遅れるようになった。それが停戦合意の内容だったそうです。だから停戦合意にこぎつけることができれば、重大な罪を犯した人でもやがて多くの富と地位を手に入れることができるという、世界に対するメッセージになってしまったと言われています。

Cf. 伊勢崎賢治、『武装解除—紛争屋が見た世界』（講談社現代新書、2004）

本来、悪人に対して裁きというのが必要ですが、人間の裁きというのはいつの時代もこのように不完全です。「神様なんか存在せずどうせ人間しかいないのだから、この世は力さえあればなんでもできる修羅の世界だ」と考える人にとって、悪事を働いてこの世で栄華を極める姿は羨ましくて仕方のないことでしょう。しかし、そんな世界はとて人間らしい世界であるとは思えません。そして神様を信じていないという日本人の多くもそんな世界が素敵だとは思えないのではないのでしょうか。このように突き詰めて考えると、人間に完全な裁きを果たすことができないのですから、すべての人は「人を超える存在が正しい裁きをなさるはずだ」と、心のどこかで正しい裁きを待ち望んでいます。

さて、神様が人となってこの世に来られました。これで完全な裁きがやってくるかと思ったら、彼は「裁きません」と言われます。もし裁きがあるとすれば、神様が救うために傍にいても、神という光の方ではなく、闇の方に向かって行くこと、これが裁きとなる（ヨハネ3・19）。裁きは神が積極的に行うのではなく、神の救いを受け入れるか受け入れないかにかかっている。神は基本的には弱い人と共におられますから、弱い人に何をしたかでその人が救われているのか、救いを拒否しているのかがわかる。それでも神様は罪人を救い続けようとなさいます。

人間は神様に対して罪を犯しても完全に償いを果たすことはできません。神の贖いの価は高く人間が払えるものではありません。神様に裁かれたら、重大な罪を犯した者だけではなく、誰一人救われません。

普通感覚では、裁きによって正しいとされるなら、この世のもので報われることが最大の目的になります。「死んだら無になる」と考えていた古代のユダヤ人にとって神様から正しい人だと判断された人は、子どもに恵まれ、財産が増え、いつも健康で、敵を打ち倒すことができると考えられていました。

しかし、神様からの救いとは、この世で報われることではありません。神様によって救われる、ゆるされるとは、人間が人間なのに神様の右の座に座り、神の子どもになることができる、それが実現することが神様の救いです。

キリスト教の「救い」は、この世で報われる、金持ちになれる、ビジネスチャンスを手に入れる、すごい能力を手にいれられるということではありません。みすぼらしく何も取り柄がなくても、聖霊がわたしたちの内に住まわれることで神の子になれるということ「救い」と言います。

神学という学問は、人間がどのように神の子なるのかということの説明するのが目的です。神学の中には三位一体論というものもあり、今日わたしたちはそのお祝いをしています。その学問も人間がどういうふうにならなっているかを説明することが目的です。神が「三つのペルソナにまします唯一の神」でないと、わたしたちが救われることができない。だからこれはすごく大事な学問になっています。

だから、わたしたちは神の子としてこの世に生きることで名声とか権力は手に入れられません。しかも、この世の不完全な裁きを行う人間の裁きによって苦しむこともある。実際に、その不完全な人間の裁きでキリストが裁かれたときに、迫害されて十字架に付けられました。わたしたちも救われてキリストと同じ神の子になっています。わたしたちは救われています。

死んでから救われると思っている人もおられるかもしれませんが、わたしたちはもう救われています。聖霊が人間を神殿としてお住みになっているのであれば神の子です。それは人間の努力によるものではありません。ですからこの不完全な社会の中において、本当にキリストと同じように生きられるかどうか、

それが一番のポイントになっていきます。キリストがこの世に神の救いを実現したように、実はわたしたち自身もキリストと同じようにこの世界の中で生きられること、これが一番大きな喜びになります。

キリストの言葉によって多くの人が力づけられて、もう一度生きてみようと思えるような、そんな人間へとわたしたちは変えられました。罪人であるにもかかわらず、罪を不問にされて、神の右の座までキリストとともに挙げられて、わたしたちは今もう神の子どもとして生きています。どうぞ、わたしたちはもう救われた者として、人の裁きを望むのではなく、神様と同じ思いでこの世界と人の救いのために生きることができますように。